

2013.8

No.67

明 | 行 | 寺 | 通 | 信

〒380-0833
長野市権堂町 2382
TEL 026-233-1524
FAX 026-237-6072
myogyoji@office.so-net.ne.jp

掲示板の言葉

つつがなく今朝も目覚めぬ
生くるとは
日々に生まること
知りたり

青柳田鶴子 4月

なかなか親の思うよう
にいかないもんじゃ
じゃがのう、こりゃ
世の親っちうもんの欲じゃ
欲張ったら切りがない

小津安二郎 監督映画
『東京物語』
5月

人生の長期予報は
当たらないのです

お天気博士 倉嶋 厚
『朝日新聞』2004年9月11日
6月



写真 大地 郷愁を感じる場所は、土が見える場所でもあります。 鍋屋田小グラウンド

大地に生きる

「ああ大地 踏んでみて 寝ころんでみて たしかな大地
ああまして祖国の土の尊さ
大空の星を仰いで 高く仰いで 歩け 歩け」

組曲『土の歌』の第二楽章「祖国の土」はテンポの速い行進曲
調です。それが、この後に急に曲調が変わり、
「しかし溝には はまるまい」

と、ここだけは、つぶやくように歌われます。

作詞者の大木惇夫氏(1895~1977年)は、代表作に「国境の町」
などがありますが、戦時中に宣伝班に徴用された経緯があり、そ
れに基づく詩を多く作ったことなどから戦後しばらくは不遇であ
ったと言われています。親鸞聖人の教えを讃える詩も多く残した
大木氏は、お盆によせる思いを次のように著しています。

「…夕空の星を見るときも 『死の灰』の怖れみちたり 地を指せば
もろものの殃(まが)がわきわい 日を継ぎて避くるよしなし 天変のそ
れさへあるに 人災の何ぞこちたき(はなはだし)…」(『盂蘭盆の歌』)
故郷が広島市である大木氏の願いに思いを馳せながらこの詩を
読めば、『土の歌』に託された祖国の歩むべく姿を考えさせられます。
大空の星を仰いでとは、自分達だけではなく、世界の誰にとつ
ても確かな目印を指しての歩みということでしょう。

祖国の土を尊ぶとは、自分を育んだ大地への感謝であり、それ
はどの国の人にとつても同じです。また足もとに眼を向ければ、
自分の立ち位置が問われます。内外を問わず、誰か標的を見つけ
て、批判を浴びせる風潮がありますが、批判している自分は大丈
夫という保証はありません。妬ましさ起因するバッシングが、
やがては自分を不幸にするという溝にははまりたくないものです。
人間のみならず生きとし生けるものを分け隔てなく育む大地を
讃えるこの組曲の最終楽章が、「母なる大地のふところに われら
人の子の喜びはある」で始まり、こんち、多くの中学・高校の
合唱祭や卒業式で歌われている「大地讃頌」です。

参考：『大木惇夫詩全集1〜3』金園社

お盆 8月13日〜16日は
朝6時から夜9時まで

開門します

前もってご連絡いただければ、これ以外の時間のお参
りにも応じます。それ以外の日も夏は、朝6時半から
夕方5時半まで(くぐり戸・駐車場扉は夜7時頃まで)
開門しています。

おしらせ

護持金ご納入のお願い

総会で皆様のご承認をいただきました今年度の護持金につきましては、すでに多くの皆様から御進納いただいております。

ありがとうございます。

まだお納めでない方はお送りした振込用紙または、ご持参にてお納め願います。お盆に参りの際にお持ちいただいても結構です。

経済状況の厳しい折、大儀と存じますが、どうかよろしくお願いいたします。

帰敬式のお申し込みはお早めに

受式予定でお申し込みをお忘れの方は、早急にご連絡ください。八月以降はお電話でお願いします。

帰敬式：九月二三日(月)一〇時三〇分～一三時

事前研修：八月三二日(土)一〇時～一二時

信毎に小説「親鸞」完結篇」連載開始

信濃毎日新聞をはじめ、全国約四十紙で七月一日から連載しています。前回の激動篇では、京都から越後に流罪となった親鸞聖人が、関東に赴き、約二十年を過ごし、京都に旅立つまでが描かれました。今回の完結篇では、京都での晩年が舞台です。

親鸞聖人が京都に帰られたのは、六十歳を過ぎた頃と推測され、帰京後は著作活動に励まれました。遠く関東では鎌倉幕府による専修念仏弾圧があり、門弟の混乱は大きく、晩年の聖人の身辺は安穩ではありませんでした。

この機会に、聖人のご生涯や教えを学びはじめたいかがでしょうか。ご質問などお気軽にお待ちしております。

イラスト佛法36 葬儀を勤める①

「終活」…人生の終わりの準備活動

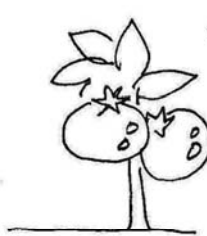
「ということがいわれ、そういった記事を見かけることが多くなりました。」

仏教では人の死をどのようにとらえているのでしょうか？

その前にまず誕生とは「いのち」として生まれてくること。

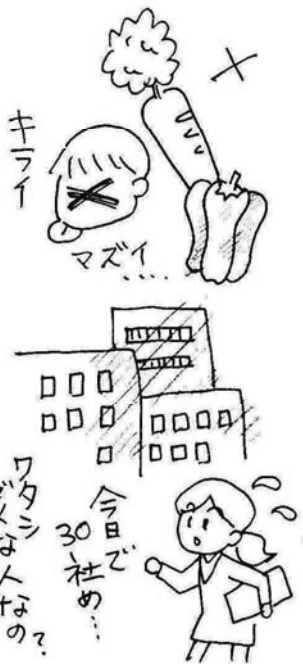


「やがて成長とともに身に付けるものが増えてきます。」



「それは必要で大切なことですが、いつの間にか…」

「いのち」であることを忘れ、



「死を迎えた時…」



「いのちを終えたなあ」



「いのちであったと、忘れられたことを思い出します。」

「人材」肩書 能力・立場

「人間」という 「いのち」

「いなくなる」

「還る」

「ともいえます」